

平成 21 年 4 月 22 日現在

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2005～2008

課題番号：17320121

研究課題名（和文） 日本列島北部の更新世/完新世移行期における居住形態と文化形成に関する研究

研究課題名（英文） Research on the settlement system and the formation of cultures in transition from Pleistocene to Holocene in northern Japanese archipelago

研究代表者

佐藤 宏之(SATO HIROYUKI)

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授

研究者番号: 50292743

研究成果の概要：

日本列島では北海道と本州以南で、寒冷乾燥気候の卓越した氷期の更新世から温暖湿潤気候の完新世への移行に伴う人類の適応行動が異なると予想されるため、その具体的な様相の解明を試みた。その結果、本州以南では、いち早く更新世末に土器文化が開始され、完新世初頭(1万年前)には定住生活・文化の確立が見られたが、温暖化が遅れて進行した北海道では、更新世以来の遊動型狩猟採集生活が継続し、8000年前になってようやく本州系の土器文化の定着をみたことが明らかとなった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	4,400,000	0	4,400,000
2006年度	3,700,000	0	3,700,000
2007年度	3,900,000	1,170,000	5,070,000
2008年度	2,800,000	840,000	3,640,000
年度			
総計	14,800,000	2,010,000	16,810,000

研究分野：先史考古学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：考古学、先史学、生態学、更新世、完新世、居住形態、旧石器時代

1. 研究開始当初の背景

更新世/完新世移行期は、不安定な寒冷・乾燥気候が支配する氷期の更新世から、安定で温暖な完新世(現世)への移行期にあたり、考古学的には旧石器時代から新石器時代への移行期に相当する。この地球規模で認められる画期は日本列島にも当てはまり、遊動的で単純な社会構成をもった旧石器文化から、定住集落を形成し発達した社会と文化を有する縄文文化への過渡期と見なされてきた。従来この移行過程は、列島全域でほぼ同時に行われたと見なされてきたが、最近の研究の進展により精度の高い調査事例が蓄積されるようになると、列島各地で異なる移行プロ

セスを有していた可能性が高いことが推測されるようになった。特に、北海道を中心とする列島北部では、本州以南に比べて定着的な生活様式の発達が遅れたために、特異な文化様相を示している。その理由としては、気候温暖化の遅れや大陸との地理的・文化的緊密性等が背景として予想されているが、本州以南とは異なり、当該地域では調査事例が不十分なため、その実態はほとんど未解明であった。

そこで、本研究では、この具体相を解明し、自然環境の変動に応答した人類の適応行動の多様性・可変性を歴史的に明らかにすることを旨として研究に着手した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、更新世/完新世移行期に関わる古環境データを獲得・整備し、核心地帯における新たな考古資料を獲得・分析して、既存の考古資料との比較検討を行う。それらのデータを最新の高精度年代測定によって詳細に時間軸上に位置づける。これらの分析を統合することによって、列島北部の更新世/完新世移行期における人類文化の形成プロセスの実態を明らかにすることにある。

本研究の特色および独創的な点はふたつある。第一に、北海道を中心とする当該地域の更新世/完新世移行期では、旧石器的な遊動生活が継続していたために、縄文文化の出現が本州以南に比べて遅れたと予想されているが、それを考古学的に実証するための肝心の居住形態論的研究がほとんど実施されていない。そこで、道央・道東をフィールドに設定し、常呂川流域遺跡群等の総合的な居住形態論研究を実施する。この研究により、初期定着・定住社会である本州以南の縄文草創期とは異なり、同時代の北海道では、細石刃を装備した遊動型の生活行動が、後期旧石器時代から引き続き展開していた実態を具体的に明らかにできるであろう。さらに、居住=生業行動の分析によって、当該地域の社会構造の一端を解明することができると考えている。

第二に、従来調査・研究が遅れている列島北部および環日本海地域北部の古環境データの獲得と整備を通じて、当時の先史人が適応していた自然環境・生態系を復元するとともに、高精度年代測定技術を用いて、環境及び考古データの精密な時間系を構築する。そのため学際的な研究組織を組織して、人と環境の相互関係史を、具体的かつ精緻に復元可能とする手法を採用している点にある。

この二つの特徴的な研究手法を採用することにより、主として行動論的側面から、移行期における列島北部の文化形成プロセスを明らかにすることができ、当該地域でなぜ縄文化が遅れて進行したか、すなわち「北の縄文文化」の形成プロセスを、より具体的に解明することを目指す。

本州以南の地域では、発掘調査と古環境データ分析の進展、年代測定データの蓄積等により、定住化のプロセスが比較的良好に解明されている。例えば、東日本では、内水面漁撈の採用が定住化のリリーサーとして機能したと推定されており、南九州では、他地域よりも早く進化した森林化(温暖化)に対応して、堅果類等の森林資源に適応した定住生活が始まったと考えられている。一方対照的に、列島北部では、こうした具体的な移行過程のシナリオを描くことに、まだ成功したとは言えない。本研究はその最初の試みである。

また、当該地域の文化・環境と密接に関係しているロシア極東・サハリン地域では、これらのデータの蓄積は、比較にならないほど遅れている。しかしながら、本研究では、こうしたデータを積極的に利用して、総合的な解釈を行うことも目的とした。

3. 研究の方法

研究の方法として、以下の研究項目を重点的に実施した。

(1) 既存関係資料の収集と整理および研究報告

日本列島北部の更新世/完新世移行期が研究の対象となるが、研究の基礎的理解には、対象地域の歴史的経緯を視野に含めねばならないことは当然である。従って、空間的には東北地方北部からサハリン・沿海州までを含む環日本海北部地域を対象とし、時間的には後期旧石器時代から縄文時代早期までを視野に入れ、発掘調査報告書等の文献を主とする考古資料や第四紀関連データの実見・収集と整理を行った。

(2) 既存調査資料の再整理

東京大学考古学研究室では、1960年代に北海道東部を中心とした、旧石器時代の遺跡の分布調査と発掘調査プロジェクトを実施している。これらのうちいくつかの遺跡について、簡単な報告が公開されているだけで、全容は明らかにされていない。さらに、既存報告資料も、正式な報告とはなっていない。1980年代以降、道内では行政発掘調査が本格化し、後期旧石器時代に関する大部の報告書が複数刊行された結果、北海道の特異な後期旧石器時代像が次第に明らかにされてきたが、道東ではこれらの行政調査があまり行われておらず、依然として旧調査資料の資料価値は大きい。

従って、本研究において、常呂川流域遺跡群に属する北見市紅葉山遺跡出土の石器群の再整理を実施することにした。

(3) 遺跡の発掘調査

近年盛んに実施されてきた行政発掘調査においても、更新世/完新世移行期の遺跡調査の事例は、依然として少ない。そこで、本研究では、当該期研究を実施するに当たりきわめて重要と考えられる2つの遺跡を選んで、発掘調査を実施した。発掘調査は秋に実施し、冬季に東京大学大学院人文社会系研究科付属北海文化研究常呂実習施設において、資料整理を実施した。

① 富良野市東麓郷1遺跡の発掘調査

2005年10月14日～11月4日

② 北見市吉井沢遺跡の発掘調査

2007年10月9日～22日、2008年10月1日～15日

(4) 研究集会の開催

下記のように、毎年度当初に研究集会を、

公開シンポジウムの形式で開催した。

①2005年5月4日～5日 「後期旧石器時代の地域編年とその比較」 東京大学法文2号館1番大教室(図書⑨)

②2006年4月29日～30日 「縄文化のプロセス」 東京大学法文2号館1番大教室(図書②⑩)

③2007年4月28日～29日 「縄文文化の成立-草創期から早期へ-」 東京大学法文2号館1番大教室(図書②④)

④2008年4月26日～27日 「〈伝播〉を巡る構造変動-国府石器群と細石刃石器群-」 東京大学法文2号館2番大教室(図書③)

(5)研究成果報告書の編集と刊行

4. 研究成果

(1)3-(4)で毎年開催した研究集会時には、2006年を除いて、「5. 主な発表論文等」で掲載した3冊の論集(図書③④⑩)を刊行した。また成果の一部については、書肆から2冊の研究書(図書②⑨)をすでに刊行している。

(2)上記(1)から(3)までの研究成果をまとめた報告書を刊行した(図書①)。

(3)日本列島北部の更新世/完新世移行期の環境変動と対応する人類活動の形成プロセスについて、以下のような解釈が得られた。

①更新世末になると気候環境は一変し、激しい寒冷期と温暖期が短期間に振幅する晩氷期を迎える。特に新ドリラス期に相当する晩氷期後半の寒冷化は大規模で、列島各地の先史集団の生業システムに、深刻な影響を与えた。後期旧石器時代後半期に形成されていた各地域社会集団は、各々個性的な狩猟装備を備えていたことから、すでに生業システムの分化が開始されていたはずであるが、晩氷期の自然環境の激変に遭遇して、大規模な技術変容・革新を試行した。

かつて「神子柴・長者久保文化」と呼ばれた「文化段階」は、移行期を画する文化の階梯ではなく、一時期北海道から流入した北方系細石刃石器群のような技術・文化情報に刺激されて、在地の集団が自らの伝統を個性的に発達させた結果、本州北部に長者久保石器群が、本州中央部には神子柴石器群が形成されたと考えられる。従来「神子柴・長者久保文化」は、大陸極東アムール流域に広がるオシポフカ文化(1.3～1.0万年前)が北海道を経由して本州以南に流入することにより形成され、後の縄文文化を生み出したと素朴に考えられてきたが、オシポフカ文化は、アムール中下流域の狭い範囲に一時的に展開した土器文化であり、列島との間の中間地帯で全く見られないことが、本プロジェクトで明らかとなった。これは重要な研究成果のひとつである。古本州島では、これらの石器群をもつ集団の文化的・技術的伝統は、その後の

草創期を通じて、在地の集団に大きな影響を与えていた。

②後期旧石器時代後半期に主として細石刃石器群が展開していた古北海道半島では、晩氷期の開始と同時に前期細石刃石器群期前葉から同後葉に移行し、さらに晩氷期中に、前期細石刃石器群期から後期細石刃石器群期に移行する。前期細石刃石器群は、より広域に移動する戦略を保持していたようで、札幌細石刃石器群や白滝細石刃石器群のような一部の石器群は、古本州島に南下していた(北方系細石刃石器群)。一方広郷細石刃石器群や忍路子細石刃石器群のような「後期細石刃石器群」は、古本州島に南下することなく、古北海道半島内で石材環境への適応戦略を深化させていた。後期細石刃石器群が北海道で展開した時期は、本州以南ですでに縄文草創期が開始されており、定着的な生活行動が出現していたため、広域移動型の後期細石刃石器群が本州以南に南下することは出来なかったと思われる。

後期細石刃石器群は、北海道において最初に確立する土器文化である早期中葉まで継続したと漠然と考えられているが、現在のところ、正確には、1.0～0.8万年前の年代値を有する考古資料は判然としない。このことは、北海道を含む北方地域では、晩氷期後半の寒冷期の影響が甚大であり、完新世初頭の急速な温暖化にすばやく適応できなかったことを示唆している。環日本海地域で移行期の存在が連続して確実に考古資料で追えるのは、列島以外では、中国の一部(長江流域～華南及び華北)程度である。ロシア極東地域では、オシポフカ文化の後、8000年前の初期新石器時代初頭までの考古学的様相はとらえられていない。こうした完新世初頭の考古学的痕跡の欠落は、ロシア極東に限らず、北海道やサハリン、韓国、中国東北部等の周辺地域でも同様である。日本列島における更新世/完新世移行期の構造変動を考えるにあたっては、常にこのことに注意を払っていかねばならない。

本研究によって発掘調査が行われた北見市吉井沢遺跡は、後期細石刃石器群に属する忍路子細石刃石器群の遺跡であるが、複雑な遺跡形成過程の影響と炉跡が未検出なことも相まって、安定した年代測定値を得ることはできなかった。依然として、忍路子細石刃石器群の存続年代は確実ではないと言えることができる。今後の研究課題であろう。

③細石刃文化の集団は、大型の植刃槍を装備して広域に移動しながら狩猟を行う旧石器時代以来の行動戦略を採用し続けていたが、一方で1.2万年前前後の測定年代値を有する帯広市大正3遺跡の爪形文土器群のような、

定着的な資源開発システムを有する集団の存在も最近明らかとなった。大正3のような縄文草創期土器群は、古北海道半島においては依然として離散的な存在にとどまるため、縄文早期中葉までの移行のプロセスは不明瞭である。この時期道南部では、長者久保石器群の北上も確認されており、少なくともかなり複雑なモザイク状・リゾーム状の構造変動プロセスが存在したと予想できる。

同じく本研究で発掘調査した富良野市東麓郷1遺跡では、この問題を解明することが調査目的の一つであったが、諸般の事情から十分な調査を行うことができず、課題を持ち越すこととなった。ただし、尖頭器類が出土している東麓郷1遺跡出土資料の微細剥片分析によれば、北海道に通用の「左肩上がり」の斜行剥離調整技術が観察されている。日本列島の縄文草創期に特徴的な尖頭器等の斜行剥離調整技術の動作連鎖は、本州系の「右肩上がり」と北海道系の「左肩上がり」に明確に区分されており、東麓郷1遺跡の加担者集団は北海道系であった可能性が高い。一方大正3遺跡の小型鋸歯縁尖頭器に観察される斜行剥離調整技術は、本州系の「右肩上がり」であることから、大正3の加担者集団は本州からの移民あるいは植民であったと推測されている。従って、従来初期の土器文化に属すると考えられてきた両遺跡の加担者集団の出自が異なる可能性が示唆されたことは、きわめて重要な研究成果であると言えよう。

大正3遺跡の小型鋸歯縁尖頭器に類似する資料は、最近道東の遠軽町旧白滝5遺跡等の白滝遺跡群からもまとまって発見された。これらの小型鋸歯縁尖頭器は、その多くは在地の「赤石山系」黒曜石製である。この尖頭器群は、新潟県小瀬ヶ沢洞窟遺跡出土の同種資料と、石材は異なるが型式学的によく類似している。同遺跡からは、本州で唯一赤石山系の黒曜石剥片3点が出土している点で注目される。新潟県と北海道の間の地域からは、今のところ関係資料が見いだせないため、早計は禁物ではあるが、北海道における定着・定住型生活行動の出現が、本州系集団の植民活動をきっかけとしている可能性がある。

大勢として旧石器時代的な行動戦略が継続していた古北海道半島とは対照的に、古本州島では、いち早く土器文化が開始されている。草創期前葉の隆起線土器群以前は、まだ土器の存在する遺跡はごく少数にとどまり、土器保有量も微少である。同時期東日本においては、細石刃石器群、大型尖頭器石器群等を主体とする石器組成が卓越するが、一方西日本では、系統を異にする細石刃石器群を有する九州島を除いては、有舌尖頭器を伴い石鏃を主体とする石器群が卓越している。この石器群に見られる東西差は、大勢としては草創期を通じて次第に均質化されていく

ようであるが、同時に進行した定着的生業システムの地域分化を反映した複雑な過程を経ている可能性が高い。

古本州島において、晩氷期後半の厳しい寒冷期(新ドリラス期)に相当するのは、草創期後半の爪形文・多縄文・押圧縄文期と考える意見が有力である。北欧でこの新ドリラス期直前に位置しているベーリング/アレレードの温暖期には、おおむね隆起線文期が当てられている。こうした対比は、主として年代値と列島内の古生態データが参照されているが、この対比がおおむね妥当だとすると、温暖期に相当する隆起線文期に比べて遺跡数が減少する爪形文・多縄文・押圧縄文期は、寒冷化が影響している可能性も十分考えられる。後者の時期に、宮崎県上猪ノ原遺跡・長野県お宮の森裏遺跡・静岡県大鹿窪遺跡等の列島で最初の集落遺跡が散見されるようになることは、寒冷化と関係する可能性が高い。ただし、環境要因は重要ではあるが、あくまでも人類の文化や社会の構造を規制する外形的な要素に過ぎず、単純な因果関係に還元することはできない。地理的・地域的な生態環境に相対した当該人類集団の、文化社会的伝統と経験知・技術知に基づく社会生態学的関係態こそが、解きほぐすべき考古学的課題となる。

④晩氷期における古本州島と北海道(半島)の資源開発システムの異同は、開発対象である植生と動物相の変化の差異にもよく反映されている。列島の中・大型哺乳類動物相は、中期更新世(30or13 万年前前後頃)の温暖期に大陸から渡来したナウマンゾウ・オオツノシカ動物群と、後期旧石器時代を通じて半島であった古北海道に、おそらく避寒のためにシベリアから流入したマンモス動物群(4.5-2 万年前頃)によってその根幹が形成された。気候環境の変動に伴いこの二つの動物群は、列島内で南北方向への移動を繰り返したが、少なくとも古本州島では、OIS3-2への気候環境変動期にあたる2万年前頃に、古北海道半島では、完新世が始まる1万年前頃になると、多くの中・大型哺乳類が絶滅して、残された動物群によって今日の動物群構成ができ上がったと考えられている。

古本州島西側では、完新世の開始(1万年前)を境にして、寒温帯針葉樹林からコナラ亜属を主とする落葉広葉樹林への交代が完了していたが、北海道では、マンモス動物群が棲息可能なステップを交えたグイマツを主とする氷期の寒温帯針葉樹林から、カバノキ・クルミ・ハンノキからなる広葉樹林、エゾマツ・ドドマツ等からなる針葉樹林、およびその混交林といった完新世型の植生に、後氷期(1.0-0.8 万年前)を通じて徐々に移行し、その交代がおおむね完了するのは8,000

年前のことになる。ちなみに、この時期は、北海道最初の安定した土器文化が開始される早期中葉に相当する。

晩氷期の気候変動は、ロシア沿海州や北海道等では花粉分析により顕著に捉えられているが、古本州島では不明瞭である。しかしながら、少なくとも東日本の広範囲で、晩氷期の気候変動に伴うと推定される海水準変動の結果形成された埋没谷(「縄文の谷」)の存在することから、古本州島でも、晩氷期の気候変動が影響を与えていた可能性は高い。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 30 件)

- ① 辻誠一郎 2009 「弥生成立期の植生と人工改変」『弥生時代の考古学』2 巻、34-46 頁、同成社、査読無
- ② 辻誠一郎 2008 「更新世から完新世へ-環境変動と生態系の構造変動-」『縄文化の構造変動』13-32 頁、同成社、査読無
- ③ 佐藤宏之 2008 「東アジアにおける後期旧石器時代の形成」『異貌』26: 2-15、査読無
- ④ 佐藤宏之 2008 「環日本海地域における細石刃石器群の伝播と構造変動」『伝播を巡る構造変動』96-109 頁、査読無
- ⑤ 佐藤宏之 2008 「日本列島における東北地方の考古学的位置」『東北芸術工科大学東北文化研究センター紀要』7: 25-31、査読無
- ⑥ 安斎正人 2008 「『ナイフ形石器文化』批判-狩猟具の変異と変遷-」『考古学』6: 119-135、査読無
- ⑦ 安斎正人 2008 「デザインの考古学」『季刊東北学』15: 154-174、査読無
- ⑧ 安斎正人 2008 「現代人の祖先」『季刊東北学』18: 188-217、査読無
- ⑨ 吉田邦夫 2008 「草創期の「寒のもどり」の原因は ET?」『考古学ジャーナル』574: 34-38、査読無
- ⑩ 吉田邦夫 2008 年代測定の原理-特に放射性炭素同位体を用いた年代測定-」『遺伝』62(6): 83-89、査読有
- ⑪ 佐藤宏之 2007 「縄文時代の狩猟・漁撈技術」『縄文時代の考古学』5 巻、3-16 頁、同成社、査読無
- ⑫ Izuho, M. and H. Sato 2007 Archaeological obsidian studies in Hokkaido, Japan: retrospect and prospects. *Indo-Pacific Prehistory Association Bulletin*, 27: 114-121. 査読有
- ⑬ Sato, H. and T. Tsutsumi 2007 The Japanese microblade industries: technology, raw material procurement and adaptation. *Origin and Spread of Microblade Technology in Northern Asia and*

North America, pp.53-78, Simon Fraser University. 査読有

- ⑭ 佐藤宏之 2007 「持続的資源利用の人類史」『地球史が語る近未来の環境』145-163 頁、東大出版会、査読有
- ⑮ 佐藤宏之 2007 「日本旧石器文化の課題」『季刊考古学』100: 19-22、査読無
- ⑯ 辻誠一郎 2007 「アカマツ文化と日本人」『森林レクリエーション』243: 4-11、査読無
- ⑰ Yoshida, K. et al. 2007 Analysis of radiocarbon dates of an archaeological site in the Russian Far East: the maritime reservoir effect as seen on charred remains on pottery. *Nucl. Instr., Meth. B259*: 467-474、査読有
- ⑱ Sato, H. 2006 Socio-ecological research of the circular settlements in Japanese early Upper Paleolithic. *Seonsa wa Kodae*, 25: 267-281. 査読有
- ⑲ 佐藤宏之 2006 「遺跡立地から見た日本列島の中期/後期旧石器時代の生業の変化」『生業の考古学』16-26 頁、同成社、査読無
- ⑳ 佐藤宏之 2006 「環状集落の社会生態学」『旧石器研究』2: 47-54、査読有
- ㉑ 辻誠一郎 2006 「三内丸山遺跡の生態系史研究: 成果と展望」『植生史研究』特別 2: 1-5、査読有
- ㉒ 安斎正人 2006 「『神子柴文化』の新解釈-学史的検討-」『考古学』4: 1-16、査読無
- ㉓ 吉田邦夫 2006 「煮炊きして出来た炭化物の安定同位体分析」『新潟県立歴史博物館研究紀要』7: 51-58、査読無
- ㉔ 佐藤宏之 2005 「日本列島の自然史と人間」『日本の地誌』1 巻、80-94 頁、朝倉書店、査読有
- ㉕ 佐藤宏之 2005 「北海道旧石器文化を俯瞰する-北海道とその周辺-」『北海道旧石器文化研究』10: 137-146、査読無
- ㉖ 佐藤宏之 2005 「ヒトはどのような場所に住んできたか-環境適応のふたつの形-」『環境-安全という価値は・・・』41-68 頁、東信堂、査読無
- ㉗ Sato, H. 2005 A perspective on the middle Paleolithic study of the East Asia. *Major Issues of the Eurasian Paleolithic*, pp. 161-171, SB RAS. 査読無
- ㉘ 辻誠一郎 2005 「生活文化史から植物を読み解く」『科学』75: 865-870、査読無
- ㉙ 辻誠一郎 2005 「更新世と完新世の植物」『日本の考古学(上)』62-68 頁、学生社、査読無
- ㉚ 安斎正人 2005 「最近の旧石器時代研究」『異貌』23: 2-33、査読無

[学会発表] (計 9 件)

- ① 佐藤宏之 他 2008 年 12 月 20 日 「北海道

北見市吉井沢遺跡」第 22 回東北日本の旧石器文化を語る会、盛岡大学

②Sato, H. and M. Izuho 2008 年 6 月 26 日、Landscape evolution and culture changes in Upper Paleolithic of northern Japan. International Symposium “The Current Issues of Paleolithic Studies in Asia and Contiguous Regions”, Altai: Russia.

③佐藤宏之・高橋健他 2008 年 6 月 21 日「北海道における更新世/完新世移行期の石器群に関する研究-北見市吉井沢遺跡 2007 年度発掘調査の成果と予備的検討-」第 6 回日本旧石器学会、首都大学東京

④山田哲・佐藤宏之他 2008 年 3 月 15 日「北海道北見市吉井沢遺跡の発掘調査」第 9 回北アジア調査研究報告会、北海道大学

⑤佐藤宏之 2008 年 2 月 2 日「地考古学が考古学に果たす役割」日本第四紀学会シンポジウム、東京大学

⑥佐藤宏之 2007 年 11 月 30 日「再び新ドリアス期の諸問題」第 27 回環境文化史研究会、東京大学

⑦佐藤宏之・山田哲 2006 年 2 月 4 日「富良野市東麓郷 1 遺跡の発掘調査」第 7 回北アジア調査研究報告会、北海道大学

⑧佐藤宏之・山田哲 2005 年 11 月 26 日「北海道富良野市東麓郷 1 遺跡第 2 次発掘調査」第 19 回東北日本の旧石器文化を語る会、北海道大学

⑨佐藤宏之 2005 年 6 月 26 日「環状集落をめぐる地域行動論-環状集落の社会生態学-」日本旧石器学会第 3 回シンポジウム、明治大学

〔図書〕(計 12 件)

①佐藤宏之編著 2009 『日本列島北部の更新世/完新世移行期における居住形態と文化形成に関する研究』東京大学大学院人文社会系研究科附属北文化研究常呂実習施設、254p.

②佐藤宏之編著 2008 『縄文化の構造変動』六一書房、210p.

③佐藤宏之編著 2008 『伝播を巡る構造変動-国府石器群と細石刃石器群-』東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室、109p.

④佐藤宏之編著 2007 『縄文文化の成立-草創期から早期へ-』東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室、132p.

⑤佐藤宏之編著 2007 『ゼミナール旧石器考古学』同成社、230p.

⑥安齋正人 2007 『人と社会の生態考古学』柏書房、305p.

⑦安齋正人・高橋龍三郎編 2007 『縄文時代の社会考古学』同成社、246p.

⑧安齋正人 2007 『前期旧石器再発掘-捏造事件その後-』同成社、187p.

⑨安齋正人・佐藤宏之編著 2006 『旧石器

時代の地域編年的研究』同成社、371p.

⑩佐藤宏之編著 2006 『縄紋化のプロセス』東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室、175p.

⑪山田哲 2006 『北海道における細石刃石器群の研究』六一書房、244p.

⑫佐藤宏之編著 2005 『食糧獲得社会の考古学』朝倉書店、265p.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 宏之(SATO HIROYUKI)
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号: 50292743

(2) 研究分担者(2005~2007 年度)

辻 誠一郎(TSUJI SEIICHIRO)
東京大学・大学院新領域創成科学研究科・教授

研究者番号: 20137186

安齋 正人(ANZAI MASAHITO)

東北芸術工科大学・東北文化研究センター・教授

研究者番号: 60114360

吉田 邦夫

東京大学・総合研究博物館・准教授

研究者番号: 10272527

山田 哲(YAMADA SATORU) 2005 年度のみ

北見市教育委員会・学芸員

研究者番号: 60376522

(3) 連携研究者(2008 年度)

辻 誠一郎(TSUJI SEIICHIRO)

東京大学・大学院新領域創成科学研究科・教授

研究者番号: 20137186

安齋 正人(ANZAI MASAHITO)

東北芸術工科大学・東北文化研究センター・教授

研究者番号: 60114360

吉田 邦夫

東京大学・総合研究博物館・准教授

研究者番号: 10272527

(4) 研究協力者

山田 哲(YAMADA SATORU)

北見市教育委員会・学芸員

研究者番号: 60376522

早田 勉(SODA TSUTOMU)

火山灰考古学研究所・所長

研究者番号: なし

出穂 雅実(IZUHO MASAMI)

札幌市埋蔵文化財センター・調査員

研究者番号: なし

高橋 健(TAKAHASHI KEN)

東京大学・大学院人文社会系研究科・助教

研究者番号: 20451776